

平成30年度 日本大学国際関係学部生活科学研究所

## シンポジウム「世界の食事情から考える 食べることの意味」開催について

日本大学国際関係学部

生活科学研究所長 安元 隆子

「食べること」は人間が生存するための基本的な欲求であり、また、必要な条件でもあります。そして、「食べること」は、歴史や宗教、地域環境や社会の影響を強く受けています。しかし、満腹にさえなれば、栄養面で問題がないというわけではなく、また、必ずしも精神的に満たされるというわけでもありません。「食べること」は私たちにとってどんな意味を持つのでしょうか。

そして、現在、私たちが暮らす日本では「飽食」が伝えられ、「食品ロス」が問題となっていますが、その一方で貧困にあえぎ、十分な食事がとれない子どもたちがいるのです。日本だけでなく、世界に目を向ければ、飢餓のために命を落とす人々が今もなお存在し、切実な問題となっていることを忘れてはなりません。この「食」における不均衡をどのように解消していったらよいのでしょうか。

こうした問題意識を基に、人間が生活していく上で重要な「食べることの意味」について、食物栄養や地域研究、国際協力、心理学などの多方面から再度見つめ直し、その問題点と解決策を国際的に考えるべく、シンポジウムのテーマを「世界の食事情から考える 食べることの意味」といたしました。

講演には、国連世界食糧計画の焼家直絵氏と静岡ムスリム協会事務局長のアサディみわ氏をお迎えし、日本大学国際関係学部と短期大学部（三島校舎）の教員が4本の研究発表とディスカッションを行いました。

本特集はその記録です。

このシンポジウムが皆様の「食べること」への関心を喚起し、よりよき「食」の世界が一人だけでなく、国際的にも実現する契機となることを期待しています。